



博士（人間科学）学位論文 概要書

感情的共感と同化行動に関する研究

Study of the relationship between emotional  
empathy and assimilative behavior

2003年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

岸 太一

Kishi, Taichi

研究指導教員： 春木 豊 教授

## 論文概要

本論文の目的はこれまでも理論的には指摘されていた同化行動と感情的共感との関連をデータに基づいた議論から実証的に検討する事であった。

第1章では従来行われてきた同化行動に関する研究を発達領域、社会領域、臨床領域の3つの領域から概観した。そして、同化行動と感情的共感との関連についても概観し、同化行動に関しては感情移入や感情共有といった感情的共感との関連が指摘されている事、さらに他者との関係についてのメッセージを伝える非言語的ツールという役割についても指摘されている事を明らかにした。

第2章では第1章で論じられた点を踏まえ、同化行動と感情的共感との関連は実証的研究から導かれているのではなく、理論研究としてそのような指摘がなされているに過ぎない点を指摘した。さらに、数少ない実証的研究では共感を認知的共感と感情的共感に分けて捉えられていない点を指摘し、まず共感を感情的共感と認知的共感に分け、感情的共感と同化行動との関連を実証的に検討する事の重要性を指摘した。

第3章では、第2章で指摘された問題点を受け、感情的共感と同化行動との関連を自己報告によって検討した。研究Ⅰでは同化行動の因子構造を明らかにし、同化行動の各因子と感情的共感および認知的共感との関連を検討した。その結果、同化行動は2因子構造である事が示された。同化行動を2因子構造とするモデルの妥当性を検討した結果、モデルの妥当性が支持された。共感との関連は、「身振り同化」因子は感情的共感と弱い相関を持ち、「感情表出同化」因子は感情的共感との相関が「身振り同化」因子より高い事が示された。そして、両因子とも認知的共感との相関が低かった。これらの事から、1) 同化行動は大きく「長期同化」と「瞬間同化」の2種類の同化行動から構成される、2) 同化行動は感情的共感と関連しているが、認知的共感との関連はほとんど見られない、3) 対人場面で生じた同化行動が「身振り同化」と考えられるような非言語的行動であるか、それとも「感情表出」であるかによって、感情的共感との関連に違いが見られる事が明らかにされた。

第4章では生理的側面から検討した。具体的には同化行動の指標として表情の同化を取り上げ、表情の同化と感情的共感との関連を検討した。研究Ⅱでは状態としての感情的共感と表情の同化の関連を検討した。実験の結果、感情的共感の有無と同化行動の生起に関連が見られた。感情的共感を促される条件では、不快な感情を表す表情(frown 表情) 呈示に対して皺眉筋の活動電位が増加し、大頬骨筋の活動電位は減少した。そして、快の感情を表す表情(smile 表情) 呈示に対して大頬骨筋の活動電位が増加し、皺眉筋の活動電位は減少した。その一方、ただ呈示された表情を見ている条件では、smile 表情に対して感情的共感を促される条件と同様の活動電位の変化が見られたが、frown 表情に対してはそのような変化は見られなかった。これらの事から、状態としての感情的共感が生じている時には同化行動も生じている事が示された。先行研究では他者の表情が呈示されただけで同化行動が生じているのに対し、本研究では一部異なる結果が得られた事から、同化行動が文化による影響を受ける可能性が示唆された。

研究Ⅲでは感情的共感特性が表情の同化に与える影響を検討した。実験の結果、感

情的共感特性の高低と同化行動の生起には関連が見られた。感情的共感特性が高い被験者は不快な表情を表す表情(frown 表情)呈示に対して皺眉筋の活動電位が増加し、大頬骨筋の活動電位は減少した。快の感情を表す表情(smile 表情)呈示に対して大頬骨筋の活動電位が増加し、皺眉筋の活動電位は減少した。その一方、感情的共感特性が低い被験者は呈示された表情に対応する表情筋の活動の変化は見られなかった。

第5章では行動的側面からの検討を行った。研究IVでは同化行動の指標としてclappingを取り上げ、clappingを行なうペアの感情的共感特性の違いによる同化行動への影響について検討した。その結果、clapping をゆっくり行なわせた時には、速度差が減少した。さらに、感情的共感特性が高いペアは低いペアに比べてより速度差が減少した。速度差の減少は両者の clapping 速度が類似の速度になっていると判断される事から、1) clapping をゆっくりと行なう場合に同化が生じる、2) ペアの感情的共感特性が高い場合により同化行動が生じやすい事が示された。

第6章では総合考察として、まずこれまでの結果について要約した。そして、これまで理論的にはその妥当性が指摘されながらも実証的な検討がなされてこなかった同化行動と感情的共感との関連性について、それを支持するデータが得られた事を明らかにした。そして各研究結果を踏まえて、感情的共感と同化行動の関連について考察を行なった。考察では感情的共感と同化行動には「取り入れ」という概念が共通して存在している事を指摘し、他者の行動を自己に「取り入れる」事によって生じる同化行動と他者の感情を自己に「取り入れる」事によって生じる感情的共感との関連性について論じた。

最後に、本研究に関する限界・問題点を指摘し、本研究の今後の展望について言及した。具体的には認知的共感と同化行動の関連、同化行動と感情的共感の因果関係を本研究の問題点として指摘した。そして、共感と同化行動の関連から、人間の心理的側面と身体的側面との関連についての研究のあり方について春木(2002)の身体心理学の観点から論じた。